

紹介

遠藤宏著

『安藤野雁追跡 幕末万葉集研究者の生と死』

鈴 木 亮

本学名誉教授遠藤宏先生の御専門は、万葉集を中心とした上代文学である。夙に、作者未詳歌に就ての論文集『古代和歌の基層』（平成三年、笠間書院）を世に問はれ、近年は「コレクション日本歌人選」の一冊として『笠女郎』（平成三十一年、笠間書院）を上梓せられた。しかし先生は、上代文学にとまらず、徳川時代後期の国学者歌人安藤野雁（文化十二年〜慶応三年）の研究も長年に互り続けていらつしやり、此の度、花鳥社より大著『安藤野雁追跡 幕末万葉集研究者の生と死』を刊行なさつた。野雁は、陸奥国伊達郡桑折の代官所役人の家に生れ、名を謙次、政美、通称を刀禰と言ふ。江戸に出て塙忠宝に学び、その後諸国を放浪し、熊谷にて客死。和歌は村田春門、本居大平の教へを受け、著すところに『万葉集新考』（未完）、『野雁集』等がある。生前はさまざま評価せられることなく逝いたもの、歿後三十年余、佐々木信綱氏の編にかゝる『続日本歌学全書第十一編 明治名家家集上巻』（明治三十二年、博文館）の巻頭に『野雁集』が収められたことから、野雁評価の機運が高まり、渡辺金造（刀水）氏は一連の研究を『安藤野雁集』（昭和九年、上田泰文堂）に結実させた。しかしこれ以降、野雁研究の進展は遠藤先生の登場を待たなければならなかつたのである。

私が、安藤野雁といふ名を知つたのは、森銚三氏の『偉人歴統編』（平成九年、中公文庫）を読んだ高校生の時分であつた。「野雁は、奇人というよりも、氣違ひじみていたほどの人であつた。」「野雁は酒が好きだつた。」といふ記述が強く印象に残つてゐる。「奇人」「酒」——これが世間の人の野雁に対する認識ではないだらうか。学部三年の頃、何気なく『国文学年鑑』を繰つてゐたところ、遠藤先生が野雁に就ての論考を数多く執筆なさつてゐることを知つた。『論集上代文学』に発表せられた「安藤野雁考（一）」（三）」を全て複写し、簡易製本して読んだものである。現地に赴き文献を渉獵し伝記をものするといふことの難しさ、そして面白さを追体験することが出来た。大学院で、遠藤先生の演習に参加した折（その後）、野雁に就て一冊に纏めることはなさらないのですか、と屢々お尋ねしたことがあるが、先生は、いづれ機会が来たらと仰つてゐたやうに思ふ。昨年（令和三年）、先生から『野雁』を出すことにしたと伺つた時は、実に嬉しかつた。つひに其の「機会」が到来したのである。

以下『安藤野雁追跡』の目次を記す。

はじめに——凡例にかえて

序章

第一部 野雁追跡

第一章 桑折—歌との出会い—（誕生〜二十三歳）

第二章 転任—失意への転換—（二十三歳〜二十七歳）

第三章 放浪—江戸・岩淵・中津川—（二十八歳〜四十八歳）

頃)

第四章 熊谷―『万葉集新考』の上梓計画と死―(四十九歳

～五十三歳)

第五章 追補の章

第一節 中津川―間家滞留―

第二節 『佐野定経(角田桜岳)日記』(その1)―富士宮、

嘉永二年―

第三節 『佐野定経(角田桜岳)日記』(その2)―江戸、

嘉永七年―

第四節 『佐野定経(角田桜岳)日記』(その3)―江戸、

嘉永七年(統)―

第五節 『佐野定経(角田桜岳)日記』(その4)―江戸、

総州成田、安政二年他―

第六節 『佐野定経(角田桜岳)日記』(その5)―江戸、

野雁周辺の人々―

第七節 『安藤政昭日記』(その1)―郷里・江戸の野雁―

第八節 『安藤政昭日記』(その2)―郷里・江戸の野雁

(統)―

第九節 熊谷―『立庵日録』と「門人録」―

第二部 歌集『旅路の草の葉』『野雁集』(常葉本) 翻刻

一 安藤野雁『旅路の草の葉』

二 安藤野雁『野雁集』(常葉本)

第三部 野雁断想

一 野雁詠断想

二 安藤野雁発掘遍歴略記―裏話風に―

附録

一 安藤野雁著作一覧

二 安藤野雁略年譜

三 索引(人名)

あとがき

本書の原点とも言ふべき第一部第一章「桑折」(原題「安藤野雁考(一)」―その著『万葉集新考』研究の基礎としての伝記―)を發表なさつたのが昭和四十七年、其処から野雁を追跡すること五十年。先生の著された野雁に関する全論考を取めた本書が、此処に無事刊行せられたことを有難く思ふものである。

第一部は、『万葉集新考』刊行を夢見た野雁の生涯を辿つた労作。奇人といふ概念に収斂させてしまつては見出すことの出来ない野雁の一生が記される。若き日の野雁は、内池永年、本居大平、村田春門に師事し、豊後国日田に於ては大儒広瀬淡窓から「属吏ノ内ニテ少シク文字アリ」との評価を得、酒を酌み交しながらの交遊が始まる。江戸に戻つては、和学講談所に入塾し、埴忠宝はじめ山崎知雄、津田真道といつた江戸住の国学者歌人と親交があつた。この頃に万葉集の註釈を思ひ立つたやうで、「第四章 熊谷」では『万葉集新考』諸本の紹介がなされる。熊谷の医家志村立庵の日記『立庵日録』を引きつ、、『万葉集新考』上梓の計画があつたことが語られるも、結局果せずにしまつた。「野雁にとっては何といつても心残

りであつたらう。」(第四章 熊谷) 其の死に際しては、次の一節を引用したい。

野雁が人と話をする時は国学か和歌のことだつたと伝えるが、その「国学」がどのような程度のものであつたか。また、時代を見る鋭い目を持っていたという話も残っているが、彼の行動には現われない。時代の流れとは別の所で彼は只管酒を飲み、万葉集の注釈に執念を燃やしていた。従つて彼の注釈の方法も、宣長学における実証精神とは異なる。文久三年和学所に入つて万葉集を担当した木村正辞の考証学とも異なる。異端であつた。しかし、維新直前のあわただしさが彼の執念を稔らせなかつたのは皮肉である。

思いを残しながら、しかし最後は弟子達に囲まれて、野の雁は落ちた。享年五十三。(第四章 熊谷)

野雁の悲しみが今に伝はつて来るものではないだらうか。「第五章 追補の章」では、新出資料をもとに野雁の動向が語られる。

第一部の魅力は、何と言つても野雁と当時の国学者歌人たちとの交流が窺へる所である。思ひがけない人物との繋がりが判り、都市と地方との学問に於る情報網の一端が垣間見られる論考と言へよう。たとへば、『佐野定経(角田椋岳 日記)に「一野雁子戸塚おたねへ文章送候儀、欽太郎分咄有之」(第五章 追補の章〔第五節〕)と登場する「戸塚おたね」は、駿河国有度郡の歌人。中村秋香の従姉戸塚種子(文政十年〜明治十九年)である。秋香の従姉ゆゑ、秋香同様漢学者山梨稲川の孫にあたり、「佐野定経の息、欽太郎秋金の

妻八重は、中村秋香の妹。秋香は、成蹊学園創立者中村春二の父である。」(同「第二節」)といふ縁があつての交流であらう。其他、学統学派に拘ることなく様々な国学者歌人と往来したことが描かれる。藤井高尚、大国隆正、猿渡容盛、伊能穎則——いづれもなつかしき人びとである。

第二部は、「本書においては、次の段階」つまり、評伝の方向に踏み込むことは極力避けて情報提供に徹しようと思つた(「あとがき」)とあるやうに、野雁の歌集二冊の翻刻。両書ともに野雁自筆本(断定は避けられてゐるが)を底本とした写本であり、資料として頗る貴重である。

第三部は、野雁に就ての随筆風の文章を収める。「安藤野雁発掘 遍歴略記―裏話風に―」では、先生の野雁追跡の歴史が語られる。野雁の曾孫佐伯周子女史を尋ねお会いになつたこと、野雁生誕の地桑折に「去国歌」と題する長歌の碑が建立せられたことが特に印象的であつた。此処では触れられてゐないのだが、歌碑に誌される長歌の訓み、大意、略伝を執筆なさつたのは遠藤先生である(桑折町安藤野雁歌碑建立の会編『野雁の人と歌』昭和五十四年、桑折町安藤野雁歌碑建立の会)。

私が知り得た安藤野雁に関わる資料は全て本書に収めた積りです。しかし、まだく情報不足です。今後の新たな資料が出て来てくれることを熱望しています。野雁の没後百五十年を超えていますが、新資料出現の可能性は残つていると考えています。(あとがき)

近いうちに新資料が出現し、続稿「安藤野雁考・補（その十）」
その著『万葉集新考』研究の基礎としての伝記―が発表せられる
のを心待ちにしたいと思ふ。

「野雁」（ぬかり・のかり）の読みに就ては、臆測として「野雁は
自身の存在を野の雁と認識したのではなからうか。」と断はつた上
で、「遠藤個人としては「のかり」に惹かれるが、野雁本人は併用
していたと思われる。」（序章）と述べられる。

なほ、「安藤野雁発掘遍歴略記―裏話風に―」の初出『文淵』二
十九号（平成六年十一月、富士川町文化協会）には、先生のお書き
になつた自己紹介が備はる。一読の価値あるものだと密かに思つて
ゐる。

〔附記〕

遠藤先生より訂正の御依頼があつたため、此処に記すこととする。
「旭堂」（四四頁、四行目）は「旭莊」の誤り。索引（四九六頁）の
「広瀬謙吉（旭堂）」も同上。

（令和四年四月三十日発行 A5判 五〇四頁 一四五〇〇円＋税
花鳥社）

（すずき・りょう 東京都立江北高等学校教諭）

安藤野雁短冊

やなきをよめる はるのあめのうちふることに我宿の柳のうれはいろつきにけり 野鴈（架蔵）

あめのうちふることに
我宿の柳のうれはいろつきにけり
野鴈